

奈良市地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」でのフィールド
ワークに関する研究報告
—「福祉行財政と福祉計画」の授業実践より—

The Fieldworkers' Study Report of Regional Child Raise Support Center
Yumenooka SAHO
—Through the Class of “Social Welfare Administration and Planning”—

中西 真
NAKANISHI Shin

本稿では、関連する文献、Web サイト等の情報を基に、授業「福祉行財政と福祉計画」で学生とともに、奈良市地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」でフィールドワーク、インタビューを実施した内容、とくに、同センターの子育てひろば（室内）の事業に着目し、スタッフと実践の支えになる組織体、福祉行財政との関係（事業申請、委託料、実績報告）、他機関との連携等の現状を紹介した。本稿には、施設を開設した背景、実践だけでなく、行財政との関係、ケース検討会議という組織体制も結びつけて着目する特徴があり、将来的に学術研究として同センターに貢献できる足掛かりとなるようにまとめた。

また、本稿は、行政から委託を受けて、学内に設置される施設を訪問する準備段階から記述し、学習の過程、学生の反応を含めることで、同センターと連携し、学生、教職員で作り上げる授業の実践報告としても示せた。とくに、教室内の学習だけでなく、施設の訪問で、学生自身が授業で扱う内容を実感し、インタビューを経験することで今後、深めていくテーマに自らで気づくことができたという成果が見られた。

キーワード：地域子育て支援センター，ケース検討会議，福祉行財政と福祉計画

Key Words：Regional Child Raise Support Center，Case Conference，Social Welfare Administration and Planning

1. はじめに

現代の日本では、少子化や核家族化の進行、地域社会の変化等、親子や子育てを巡る環境が大きく変化してきて、家庭や地域の子育て機能が低下し、子育て中の親には孤独感や不安感の増大等の問題が生じているとされる。また、少年非行・問題行動の発生にも幼少期の育ち（生育歴）が関係してくるので、子育て支援、保育・教育のあり方が重要という指摘もでき¹⁾、1950年から京都市独自に行われ、委託児は0～3歳までを対象とし、10名前後の異年齢小集団での家庭的な保育を行う事業（京都市昼間里親 乳児保育室）の実践者や研究者からも乳幼児期の育ちが重要だという主張が出されている²⁾。

親も安心して、子どもが健やかに成長するために実施される子育て支援事業の1つである「地域子育て支援センター」は、1995年に少子化対策として、国が策定したエンゼルプランによって、全国に設置されてきた施設である。厚生労働省は、保育所等で育児不安に関して専門的な相談ができる「地域子育て支援センター事業」や子育て親子が気軽に集い、交流できる「つどいの広場事業」によって、子育て支援の拠点作りを進めてきた。さらに、2007年度から児童館の活用も含めて、新たに地域子育て支援拠点事業（ひろば型、センター型、児童館型）として再編し、子育て家庭が歩いていける身近な場所に、親子が集まって相談や交流ができるよう、すべての中学校区での設置（全国10,000か所）を目指した拡充が図られている³⁾。

地域子育て支援拠点事業^{注1)}の目的は「地域において子育て親子の交流等を促進する子

育て支援拠点の設置を推進することにより、地域の子育て支援機能の充実を図り、子育ての不安感等を緩和し、子どもの健やかな育ちを促進すること⁴⁾とされている。また、厚生労働省が公表している地域子育て支援拠点事業実施箇所数（子育て支援交付金交付決定ベース）では、2012年に全国で、ひろば型は2,266か所、センター型は3,302か所、児童館型は400か所（3つの合計は5,968か所。奈良県は、2012年に、ひろば型が31か所、センター型が16か所、児童館型が0か所）となっている⁵⁾。

「子育て支援センター」をタイトルに持つこれまでの論稿では、全国の自治体に広がる「地域子育て支援センター事業」の設置、運営体制をアンケート調査して概要を示すこと⁶⁾、また、「地域子育て支援センター」を「親子の居場所」と「リスク管理を行う福祉制度」の価値がせめぎ合う場と捉え、実践のことを丹念に描き出すこと^{7, 8)}等をしてきた。本稿では、実践や運営体制のみならず、それらの知見を基にして、論文検索 CiNii で「子育て支援センター」をタイトルに含む論文が初めて登場した2000年からを対象とし、福祉行財政と子育て支援センターの関係、大学と子育て支援センターの連携、子育て支援に関する他機関とのネットワーク、機関内で行われる会議（研修、ケース検討等）を実践にいかす方法等、「地域子育て支援センター」の組織と実践に関連するテーマを主に扱う。

本稿の目的は、行政の委託^{注2)}があり、大学に設置された「地域子育て支援センター」における実践とそれを支える組織体・会議、他機関や行財政との関係を知るための足掛かりを築くこと、そして、学生の実践的な学びの場として、大学内に存在する子育て支援センターを授業実践にいかすことも目指した「福祉行財政と福祉計画」の授業に関する研究報告を行うことである。データは、概要を押さえるために、奈良市地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」（以下、「ゆめの丘 SAHO」と表記する）に関する論稿、Web サイト、パンフレットを使用し、「ゆめの丘 SAHO」のセンター長（以下、センター長と表記する）、「ゆめの丘 SAHO」を組織的にバックアップする担当の奈良佐保短期大学の専任教員（以下、バックアップ担当教員と表記する）の1人、センターの利用者である2組の親子に行ったインタビューデータを参考に、実践の様子を見て、親子と話して遊ぶ中で得た現場の情報をいかしている^{注3)}。他にも、論文検索 CiNii で「子育て支援センター」をキーワードとして調査し、とくに組織、会議と実践の関係、連携、ケース検討会議等にかかわる論稿を参考にした。まず、「ゆめの丘 SAHO」、筆者の担当する授業「福祉行財政と福祉計画」の概要を示し、さらに、実践と行財政の関係性を探るために行ったフィールドワークについて、準備、実施、今後の予定に分けて記述して、研究報告を行っていく。

2. 奈良市地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」でのフィールドワーク、準備

2-1 奈良市地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」の概要

「ゆめの丘 SAHO」は「奈良市の委託を受け、奈良佐保短期大学の構内にできた子育て支援センター」であり、「親子がゆったりとほっこりとできるつどいスペース、子育てに関する総合相談、バラエティに富んだイベントや講座など」を行う。また、「子どもが大好きな現場経験のあるスタッフや大学教員が常駐し、気軽に親子が楽しめ、交流できる場を提供」している⁹⁾。このことから「ゆめの丘 SAHO」は、奈良市の委託を受けて、奈良佐保短期大学内に設置され、大学との連携もあって、つどいスペース、子育て相談、イベント、講座等を行う「地域子育て支援センター」であることがわかる。

「ゆめの丘 SAHO」では、2014年度から事業内容の特徴として、「1. 環境を活かした子育て支援の取組み、2. 交流の場としての機能を重視、3. 子育ての総合相談窓口、4. 家族支援への取組み、5. 地域の拠点作り、6. つどいの広場との連携・支援、7. 地域の公民館、児童館などとの連携^{注4)}による子育て支援」¹⁰⁾の7点を掲げている。パンフレット、Web サイトを見ると、具体的には、子育てひろば（室内）、ちびっこひろば（グラウンド）、子育て相談^{注5)}、イベント・講座の開催、情報提供を行っている。今回のフィールドワークでは、子育てひろば（室内）での実践を学生とともに授業で見学した。本稿では、子育てひ

ろばの実践・相談やそれを支える職員・教員、会議といった組織、福祉行財政、学外との連携を中心に記述していく。

子育てひろば（室内）は「お子さんとゆっくり・ほっこり遊んでいただけるひろば」であり、「おもちゃや絵本のほか、授乳スペース・ベビーベッド・お食事コーナー等の設備も整えて」¹¹⁾いる場である。Web サイトでは、子育てひろばの開館時間は「月～金曜日 10:00～16:00、第2土曜日 10:00～12:00 ※日曜・祝日・第1・3・4土曜は休館」、対象は「概ね3歳までの乳幼児と保護者及び子育てに関心のある方」となっている⁹⁾。また、利用方法は「事前のお申し込みは不要」「無料」「利用時間内にご自由に」来館する形式になっている。そして、大学に設置された子育て支援センターであるので、利用される親子が一部の大学施設（大学食堂、自然広場、図書館、子育て支援センター専用の駐車場^{注6)}、学内駐車場）も使用できる¹¹⁾。

「ゆめの丘 SAHO」のメンバーについて、センター長は「長年幼稚園教諭として幼児教育に携わり、さまざまな親子と向き合って子どもの育ちを支えてきた」奈良佐保短期大学の非常勤教員（元専任教員）である。センターのスタッフは「保育士資格や幼稚園教員免許状を所有し、保育現場経験のあるもの」が採用されている。また、大学内では様々な資格を持つ教員が子育て支援センターのバックアップ担当として任命されている¹⁰⁾。これらは「ゆめの丘 SAHO」にかかわるメンバーが子どもの育ち、親へのサポートができる資格、経験という専門性を兼ね備えていることを示す。

会議については、バックアップ担当教員が「子育て支援センタースタッフと月に一度のミーティングを行い、支援が必要なケースの検討や、支援内容の確認、大学と支援センターの調整について」¹¹⁾等の内容で開催されている。また、「ゆめの丘 SAHO」のスタッフミーティングは「スタッフが事例を出し合い、またそれをセンター長がスーパーバイズして、支援の方向性を定めている」とされ、バックアップ担当教員の会議も含め、「子育て支援者として親に『何を』『どのように伝えていくか』について、話し合われている」¹¹⁾とされる。これらは、スタッフのミーティングを行うのに加えて、バックアップ担当教員の会議もあって、それらが実践を支えるための研鑽、情報共有、役割分担等になっていることを示している。

学外の関係者との連携として、活動・連携図では「ゆめの丘 SAHO」が他の子育て支援センターや相談連携施設（子ども家庭相談センター、保健所、医療機関、障害者生活支援センター、保育所、幼稚園）等との関係性があると示す¹⁰⁾。奈良市における地域子育て支援センター事業の実施状況として、①地域子育て支援センター「奈良」（所在地は法蓮町・佐保山保育園内）、②地域子育て支援センター「中登美」（所在地は中登美ヶ丘・中登美団地 D21 号館内）、③地域子育て支援センター「そらいろ」（所在地は三条本町・はぐくみセンター〔奈良市保健所・教育総合センター 2階〕）、④地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」（所在地は鹿野園町・奈良佐保短期大学内）、⑤地域子育て支援センター「とみお」（所在地は三松）、⑥地域子育て支援センター「Saya」（所在地は学園北・パラディ学園前 II 6階）、⑦地域子育て支援センター「Peace」（所在地は秋篠新町）の7箇所があり¹³⁾、奈良市内での広がりもある。連携の1つとして、お互いの課題や問題を持ち寄って、交流することを目的とし、1年に2度、つどいの広場職員や民生委員、子育て支援者、子育てサークルを対象に交流会を開催している¹¹⁾。また、「ゆめの丘 SAHO」では、資質向上のための取り組みとして定期的に研修も行い、奈良市の子育て支援者（子育て支援センター・つどいの広場、地域の支援者や子育てサークル）にも開催の案内をしている¹⁰⁾。

加えて、奈良県には「地域の子育て支援大学^{注7)}」のネットワークが存在し、奈良県のWeb サイトでは「子育て中の親の不安感・負担感を軽減するため、県と保育士養成課程を有する大阪樟蔭女子大学、畿央大学、帝塚山大学、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部、奈良教育大学、奈良佐保短期大学が連携し、地域での子育て支援の充実に取り組んで」¹⁴⁾いると紹介される（帝塚山大学は、子育て支援センター「まつぼっくり」、奈良学園大学奈

良文化女子短期大学部は、奈良市つどいのひろば「ぶんたん」、奈良佐保短期大学は「ゆめの丘 SAHO」を設置している。大阪樟蔭女子大学は2014年現在、関屋キャンパスが奈良県にある。これらからは、奈良佐保短期大学（「ゆめの丘 SAHO」）が子育て支援に関するネットワークに参加し、学外との連携も行っていることがわかる。

実践、相談では「子育て支援センターが求められる役割としては、まずは親子を受容し、そして親の力を信じて待ち、育てることにある」¹¹⁾と考えられている。これは、来館が自由な子育て支援センターで、もし強い指導が行われた場合は親が来館しにくくなり、支援が届かなくなるおそれがあることを考えた上での支援方針といえる。相談に関して、ひろばで専属のスタッフが見守る、子育て総合相談として、電話による相談（利用時間：月～金 10:00～16:00、相談は無料。保育士、幼稚園教諭の資格を持ったセンタースタッフが対応）か、個人面談による相談（利用時間：月～金 10:00～16:00 ※要予約。様々な専門知識を有するセンター長や奈良佐保短期大学教員が対応。必要な場合は、より専門的な機関を紹介。面談の日は、予約電話の際に決める。予約相談表もある）が行われる。対応する相談員の資格には「保育士、幼稚園教諭、看護師、保健師、社会福祉士、介護福祉士、栄養士」等がある¹⁰⁾。このように、「ゆめの丘 SAHO」は、学外の機関とも連携してネットワークを形成しながら、子育て相談や実践を行い、スタッフミーティング、バックアップ委員会等の会議で実践を研鑽し、情報共有、役割分担によるサポートが行われているとわかる。

2-2 授業「福祉行財政と福祉計画」の概要

授業「福祉行財政と福祉計画」は、地域こども学科こども保育コース保育ソーシャルワークフィールドの必修科目であり、学修内容／到達目標として「社会福祉サービスにかかる行財政のシステムを把握し、公・民・市場の三者の立場のなかで検討をしていく」「国・都道府県・市町村の役割を整理し、今後の課題として要求される市場化や民営化ということについても検討を行う」「福祉計画の意義や目的、主体、方法などについても理解をしていく」と掲げ、行っている。また、「ゆめの丘 SAHO」でのフィールドワークは、奈良市に委託を受けた「地域子育て支援センター」の「子育て支援の実践」と「福祉行財政、計画」の関係について、センター長、バックアップ担当教員へのインタビューや、子育て支援センターの雰囲気、実践の現状を見て、感じ、知っていくという目的で行った。授業のスケジュールは、以下の通りである。

<授業日程と概要>

- 第1回 イントロダクション 「福祉行財政のシステムとは」(2014年9月22日4限)
- 第2回 「社会保障を取り巻く状況」(9月29日4限)
- 第3回 「福祉行財政の実施体制と役割①」(10月6日4限)
- 第4回 「福祉行財政の実施体制と役割②」(10月13日4限) →補講：10月24日5限
- 第5回 「福祉行財政の実施体制と役割③（フィールドワーク）」(10月27日4限)
- 第6回 「福祉行財政の動向①（フィールドワークの振り返りを含む）」(12月1日4限)
- 第7回 「福祉行財政の動向②」(12月1日5限 ←10月17日休講分の補講)
- 第8回 「福祉計画の意義と目的」(12月8日4限)
- 第9回 「福祉計画の主体と方法」(12月15日4限)
- 第10回 「福祉計画の実際①子ども」(12月22日4限)
- 第11回 「福祉計画の実際②高齢者」(12月22日5限)
- 第12回 「福祉計画の実際③障がい者」(2015年1月5日4限)
- 第13回 「福祉計画の実際④地域」(1月19日4限)
- 第14回 「福祉計画の実際⑤貧困への支援」(1月26日4限) レポート提出
- 第15回 まとめ(2月2日4限)

3. フィールドワークの準備

3-1 奈良市地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」関係

フィールドワーク先を決定し、連絡を取り合うまでのスケジュールは以下の通りである。フィールドとして、奈良県庁や奈良市役所等も検討した。しかし、実践との関係が見える方が学生にとってわかりやすく、移動に関してもスムーズで授業時間が有効に使い、学内の身近な組織だと関係性を構築した深い話が聞きやすいと考え、地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」への訪問を決定した。また、授業で事前準備・学習を行ったときに、学生の希望や必要なことが出てきたら、その都度、センター長やバックアップ担当教員に連絡し、状況をこまめに伝えて対応した。

<ゆめの丘 SAHO 関係の準備スケジュール>

・8～9月

「ゆめの丘 SAHO バックアップ担当教員」と数回メールのやり取り（フィールドワークの内容、日程調整、センター長へ紹介依頼）。

・10月24日

「ゆめの丘 SAHO」に訪問し、センター長に依頼書を手渡し、事前打ち合わせ（依頼書のデータをバックアップ担当教員にもメールで送付）。

3-2 「福祉行財政と福祉計画」の授業関係

「福祉行財政と福祉計画」（基本的に月曜4限の授業、実習等の関係で月曜5限にも行うことがある）での事前準備・学習のスケジュールは、以下の通りである。学生の希望を聞きながら、フィールドワークに必要な基礎知識を学んでいくように努めた。とくに、インタビューの知識を文献で得るようにし、技術は体験でも学ぶようにした。授業の際には、グループで活動、議論できる土壌を整えるため、教室内の雰囲気留意し、議論しやすくなるように心がけた。具体的には、議論を行う場合に、筆者が大まかなテーマを設定し、学生が主体となって議論を行いながらも論点から外れないように、適宜注意を促すようにした。「ゆめの丘 SAHO」の情報は、パンフレット、Webサイトを閲覧し、インタビューで聞いてみたいことも全員で出し合って、共有した。学生との議論で、「ゆめの丘 SAHO」スタッフの方々だけでなく、利用している子どもと遊んで、親にもインタビューをしてみたいという希望があった。そこで、センター長との事前打ち合わせの際に、筆者から依頼して快諾を得た。

<フィールドワークの事前準備、学習の日程>

・9月22日（月）4限（14:40～16:10）

「福祉行財政と福祉計画」で扱うテーマ、社会福祉士について、概要を説明した。そして、テキスト『（新・社会福祉養成講座 10）福祉行財政と福祉計画』¹⁵⁾を見ながら、学生が考える行政のイメージを付箋に1つずつ書いて、白紙に貼り付け、意味内容ごとにまとめていくという KJ 法に類するグループワークを行い、全員で議論した。また、今後授業でフィールドワークの時間を設定し、「ゆめの丘 SAHO」を見学し、インタビューを実施することを学生に伝えた。

・9月29日（月）4限（14:40～16:10）

「ゆめの丘 SAHO」の Web サイトやパンフレットを見て、筆者が概要を説明し、学生達が主体となって、インタビューで聞きたいことを考えていけるように努めた。

フィールドワークやインタビューの知識を得て、実践できるように、関連する文献、佐藤郁哉著『フィールドワーク：書を持って街へ出よう 増訂版』¹⁶⁾の概要説明を筆者が行い、その後、持参した文献を回覧し、印象、感想を聞き、議論を共有した。また、文献内に掲載される、佐藤郁哉著『暴走族のエスノグラフィー：モードの叛乱と文化の呪縛』¹⁷⁾の記述、インタビューの練習にも学生達が関心を持ったので、授業で取り扱うことにした。

・10月6日（月）4限（14:40～16:10）

先週に引き続き、佐藤郁哉著『フィールドワーク：書を持って街へ出よう 増訂版』¹⁶⁾を扱い、「野外調査」pp.32-35、「インタビュー」pp.191-198の部分を輪読した。また、佐藤郁哉著『暴走族のエスノグラフィー：モードの叛乱と文化の呪縛』¹⁷⁾を回覧した。学生達は、文献から1980年代の雰囲気を感じとり、興味・関心を持ち、閲覧していた。

さらに、子育て支援センターでのフィールドワークに向けて、インタビューの練習を行った。まずは、日常的なテーマ（趣味、生活、友人・交遊関係等）、次に、卒論テーマ等と、授業を担当する筆者が話題を提供した。①1人で考え、この人に、この話を聞いてみたいということを書く、②1対1、複数等で練習。インタビューの聞き手、語り手でない人は、観察して記録、という手順をとった。インタビューの練習を筆者も一緒に行い、学生達も実際に練習してみると、関心を持って実施した。練習後には筆者の感じたこと、インタビューで大切なことを伝えた⁸⁾。

・10月24日（金）5限（16:20～17:50）

第4回目の予定であった10月13日が台風の影響で休講、翌週の月曜20日は大学祭の代休でしばらく間が空いたため、まずは学生達の感覚が戻るよう努めた。学生達に卒論テーマと希望の仕事、将来の希望等を聞いて、今回のフィールドワークや授業と関連づけて考えられるように話した。

授業で話し合った内容を筆者がまとめた依頼書を見て、書き方を学んでもらい、文章表現・誤字脱字等をチェックした。また、当日の服装（今回は普段着）、インタビュー項目、使用機器（ICレコーダー）等を皆で確認した。

佐藤郁哉著『フィールドワーク：書を持って街へ出よう 増訂版』¹⁶⁾（「インタビュー」pp.191-198、「マナーとエチケット」pp.271-281.）を回覧し、フィールドワークの実施に際しての注意点（出欠連絡の徹底、時間厳守、その他失礼のないように）を共有した。そして、フィールドワークを基にレポートを作成すること、大まかなテーマを伝えた⁹⁾。

4. フィールドワークの実施と今後の予定

4-1 フィールドワーク当日の概要

フィールドワークの実施は「福祉行財政と福祉計画」の授業（第5回 10月27日の月曜日4限の14:40～16:10）で行った。教室に集合して、「ゆめの丘 SAHO」に向かった参加者は、受講生全員（男性3人、女性2人で合計5人）、バックアップ担当教員1人、授業担当の教員である筆者の合計7人であった。「ゆめの丘 SAHO」のスタッフは2人とセンター長が勤務し、室内を利用している親子は、父親と6ヶ月程度の子ども、母親と2歳程度の子どもという計2組であった。以下、フィールドワーク、当初の予定と実際を記述していく。

<フィールドワーク、当初の予定>

- ① 4限（14:40）に235教室に集合、出欠確認をする。
- ② 地域子育て支援センターの訪問に関して、注意事項（あいさつ、利用者の方々への配慮、センター長へのインタビュー時に使用するICレコーダーの使用方法、携帯電話マナーの確認等）を伝える。その後、バックアップ担当教員からも話をさせていただく。
- ③ 14:50頃、子育て支援センターに到着する。
部屋の中を見学、利用者の方々とも話し、交流する
- ④ 15:15頃、見学や利用者の方々とのお話が一段落した頃に、別室（会議室）に移動し、センター長から（バックアップ担当教員も含めて）インタビューを行う。
- ⑤ 16:00、利用者の方々の方が帰られてから、可能であれば、部屋の雰囲気をレンズ付きフィルムで撮影、先生方、スタッフの方々、学生達での記念撮影をさせてもらう。
- ⑥ できる範囲で今日の振り返り、次回までに行うことを確認して、授業を終了する。

<フィールドワークの実際>

施設内の見学では、赤ちゃんがずりばいをしたり、親子で遊んだりする場面を見て、学生、筆者自身も利用されている方々と交流を持つことで、実践の場を体感することができた。また、赤ちゃんを専用台において、センターを利用している父親がおしめを替えてい

る場面も見ることができた。利用されている親子へのインタビュー^{注10)}は、父親と6ヶ月程度の子ども、母親と2歳程度の子どもという計2組に行くことができた。インタビュー時には、許可を得て、ICレコーダーを使用した。

フィールドワークで当初の予定と実際の流れが異なったのは、見学時に許可を得て、利用されている親子が写らないように施設内を写真撮影できた点である。また、見学と利用者の親子と交流する時間が14:50から15:30頃までとなり、センター長、バックアップ担当教員へのインタビュー（詳細は4-2）の時間が短くなったことも変更点である。訪問後（10月31日）にお礼と今後のことについてのメールを送付した。

4-2 インタビューの内容とフィールドワーク後

(1) 「ゆめの丘 SAHO」関係者へのインタビュー内容

授業「福祉行財政と福祉計画」の受講生（5人）と筆者で、「ゆめの丘 SAHO」のセンター長とバックアップ担当教員（1人）に、地域子育て支援センターと奈良市の福祉行財政との関係、実践・会議、他機関との連携等を中心に、半構造化のインタビューを実施した。インタビューの場所は、奈良佐保短期大学3号館1階の会議室（ひろばとは別の場所）であり、インタビューの時間は、15:30から30分程度であった。

①奈良市、奈良県との関係

「ゆめの丘 SAHO」が委託を受けている行政（奈良市）との関係では、地域子育て支援事業の申請、予算、実績報告、他機関との連携、地域子育て支援センターの役割等についての話題があった。

地域子育て支援事業の申請について、センター長は「2009年に、奈良市で行われ、地域子育て支援事業に関して5年に一度、開催されるコンペでは、4団体の申請から選ばれ、事業申請が認められた。コンペでは、地域子育て支援事業に関する現状と課題、今後についての報告を行った」と話された。また、予算については、センター長が「研修や人件費も奈良市から支払われている委託料内で行っている」とし、バックアップ担当教員が「奈良市は、2014年から活動ごとに予算をつけるようになった」と述べていた。さらに、実績報告について、バックアップ担当教員は「来館者の人数、住所、相談があれば大まかな内容、件数を実績報告として、毎月、奈良市に報告している」とし、センター長は「実績報告の提出はあるが、奈良市の行政におけるスタッフが少なく、行政からセンターへの訪問はあまりない。子ども育成課が地域子育て支援事業以外のこと（児童手当、子育て相談等の業務）も一手に担っている」と語られた。

地域子育て支援センターの役割が地域によって異なることについて、バックアップ担当教員が「地域によっては、地域子育て支援センターが要保護児童対策地域協議会での積極的な役割を担ったり、乳幼児訪問事業で市役所の人権課とともに、ドメスティックバイオレンス（DV）ケースでリスクの高い家庭に訪問したり、全戸訪問事業で子育て支援センターのスタッフが家庭訪問したりする場合もある。奈良市では、今のところ、地域子育て支援センターが家庭訪問、要保護児童対策地域協議会で果たす役割等のルールが決まっておらず、勝手にできない状況である」というように、地域ごとにセンターには様々な役割があるとセンター側が把握していることが示された。このように、奈良市からの委託料によって、「ゆめの丘 SAHO」は運営されており、奈良市への実績報告が必要となってくるのがわかる。また、地域子育て支援センターの役割が地域によって異なり、「ゆめの丘 SAHO」も模索している段階であることがインタビューから示されている。

②実践、相談とそれを行うスタッフ、他機関との連携に関して

「ゆめの丘 SAHO」の実践について、バックアップ担当教員が「ゆめの丘 SAHO はセンター型の地域子育て支援センターであり、ひろば型との相違は、相談機能を持っていて、子育てに関する企画、研修を行い、地域で子育て支援を展開することである」と述べていた。また、相談については、センター長が「電話相談では、奈良市内に住む0～3歳児の子育て期にある親だけでなく、奈良市外や0～3歳児を持つ親以外の相談も幅広く受けている」

とし、さらに、「子育てに関するニーズを掘り起こすため、センター内だけではなく、地域で子育て支援事業を展開している。例えば、児童館に出向いて子育て支援事業を展開している」ということも話された。

スタッフについて、センター長が『ゆめの丘 SAHO』のスタッフ全員は、幼稚園教諭と保育士の有資格者、勤務経験者」であり、「センター長以外でも相談が受けられる」と話していた。さらに、センター長が「スタッフは全部で7人であり、1日にスタッフがパートタイム勤務で2人ずつの勤務し、加えて、センター長も週に数回の勤務でサポートしており、事務作業、連絡、相談、見守り等といった子育てひろば（室内）の運営をしている」『ゆめの丘 SAHO』では、奈良佐保短期大学に教員がいて実践をバックアップする体制があり、このことは地域子育てセンターが大学にあるメリットの1つである」と述べていた。

他機関との連携について、センター長は「児童館、奈良市の健康増進課との連携を深めていくことを考えている。とくに、健康増進課とは、1歳半、3歳児検診、こんにちは赤ちゃん事業等で、ひとり親、貧困、若年層、例えば15、6歳で母親になった場合等の把握とリスク状況を確認している。その情報を提供してもらうか、健康増進課から要支援者に『ゆめの丘 SAHO』を紹介してもらい体制を作りたい。今は、子育て支援事業をしている他機関に働きかけている」と新たな連携について考えておられた。バックアップ担当教員も「子育て支援機関のネットワーク作りのことを奈良市の子育て支援担当者に聞いたところ、自主的に進めていくように依頼された。過去に子育て支援機関が集まれるように呼びかけを行ったが、なかなか集まりにくい状況であった。他の機関とつながることは大変なことであるので、行政が呼びかけてネットワークを構築する、ルール作り等のサポートがほしい」と、ネットワーク作りの苦勞を述べられていた。

また、奈良市だけでなく、奈良県全体に範囲を広げたネットワークについて、センター長は「奈良市の子育て支援機関のネットワークとして、保育士養成校で作るネットワークがあり、依頼があれば講演に行かせてもらっている。自分の専門分野のことで子ども向け、親向け、支援者向けの研修をしている。2014年もすでに2件の講師依頼を受けてきた」とし、バックアップ担当教員も「奈良県の保育士養成校で作るネットワークには、現在、全員で事例検討をする機会がないので、あってもよい」と述べていた。

このように、「ゆめの丘 SAHO」の実践、相談とそれを行っているスタッフの特徴をセンター長、バックアップ担当教員ともに捉えている。他機関との連携は、自主的に行っていて、今後さらなる進展を目指していることがインタビューを通して、わかった。

(2) フィールドワーク後の授業での振り返り

フィールドワークの後に、学生達と今回の振り返りを行うと、以下のような「感想」と「改善すべき点」に関する意見が出てきた。

感想として挙げられたのは「利用されている母親から、奈良佐保短期大学の教員が行う子育て相談、講座に今は参加していないが、『ゆめの丘 SAHO』は相談に乗ってくれるスタッフがいてよいところだということがインタビューで聞いてよかった」「子どもの父親が『ゆめの丘 SAHO』に来ているのに驚いた。保育園のお迎えも父親が行くということもあるようで、以前と比べて、変わってきたと感じた」等の内容であった。

改善すべき点として挙げられたのは「インタビュー時間の確保が難しかった」「訪問時に利用されていた親子の人数が2組と少なく残念だった」「インタビューしているところを先生方や職員の方々に周りから見られていると自由な雰囲気が弱まり、センターを利用されている親子も緊張して、雰囲気も固くなっていたような気がする」「利用している親子の人数が少なく、話しかけづらかった。5組ぐらいの親子が利用していたら話しかけやすくなると思う」「インタビューでの話が深い内容の場合だとそれ以上は聞きにくくなるので、話の内容が他に聞こえない場所があればよかった」「写真撮影は、センターを利用する親子にどのように伝わったのか」「受講生の役割分担を明確にしたほうがよかった。例えば2~3人組ずつのグループで、インタビュアー（挨拶と趣旨説明を含む）、記録者といった

役割を作っていくことが考えられる」等の内容であった。

また、感想の中には「センター長のお話は専門的、運営の内容が多かった」と今後の学びにつながるような発言もあった。さらに、「事前にこちらで考えていた質問が少なかった」というある学生の発言に対して、別の学生が「事前に、どのような方々が利用されているかわからないので話しかけづらい」と発言し、議論した結果、「可能であれば何回か行かせていただくのがよい」という案も出てきた。このように、フィールドワークの振り返りでは、地域子育て支援センターに訪問、インタビューで得て、感じたことを共有し、これからの学生達の学び、将来の仕事や生活、さらには授業「福祉行財政と福祉計画」の授業運営にもいかすことができる良い機会となった。

(3) 学生の学びと今後についての考察

フィールドワーク、授業を通じた学生の学びとして、主に3点あげられる。第1は、教室内の学習だけでなく、フィールドワークを行うことで実際に見て、授業内容に関する実感が得られたことである。これは「文献を読み、知識としては男性の子育てや育児休業について知っていたが、当事者の話を聞いて、実際の苦労を実感できたことが大きな学びだった」「利用されている親子やセンター長の話によって、福祉は1人ではできず、様々な職種、人々が連携していることを感じた」等、授業における学生の意見やレポートから読み取ることができた。第2は、インタビューの経験ができたことである。これは「最初、緊張して、施設を利用している親子に話しかけられなかったが、インタビューをし始めると、質問ができ、進めることができた」「子どもと遊ぶのと異なり、大人にインタビューするのは緊張した」等が学生の意見として出されたのでわかった。第3は、フィールドワークをして、学生が今後、深めていくテーマに自ら気づいたことである。これは「施設をよくするだけでなく、利用する親子、利用料金等のことも行政は考えてほしい」「保育所の入所、自分の家庭での育児、男性が育児休業を取得することの困難性等をこれからも考えていきたい」「父子家庭と母子家庭に対して、周囲・社会の反応が異なる理由を考えてみたい」等、学生の意見、レポートからは今後の学習、仕事に結びつけて考えていることを読み取ることができた。

学生の意見も踏まえて、地域子育て支援センターに関する資料（利用者支援事業実施要綱、奈良県地域子育て支援拠点運営マニュアル、子育てひろば全国連絡協議会のWebサイト等）を用いて研究を深化させ、学生の事前学習と振り返り、当日の流れや状況の共有しながら、センターの方々との打ち合わせ等をさらに計画し、実践していくことがこれからの課題である。具体的には、今後も議論を深め、「ゆめの丘SAHO」でのボランティアを行ったり、「ゆめの丘SAHO」に関する資料（センター通信、奈良市地域子育て支援センター広場事業利用者アンケート、支援プログラム等）を熟読したりすることや、継続したインタビュー、アンケート調査を積極的に行うことができるように準備を進め、現場からの情報を加えた学びを深められるように考えている。

5. まとめ

以上、奈良市に委託を受け、奈良佐保短期大学内に設置されている地域子育て支援センター「ゆめの丘SAHO」の事例を通じて、地域子育て支援センターでの会議、学外での連携等の概要、行政と地域子育て支援センターの関係を見てきた。本稿では、文献調査やインタビュー調査で得た情報によって、「ゆめの丘SAHO」が設立される背景、同センターにおける、①福祉行財政との関係（奈良市からの委託料による運営と実績報告）、②他機関との連携、ネットワークの形成、③地域子育て支援センター内で会議（ケース検討会議、スタッフミーティング、バックアップ担当教員が集まるバックアップ委員会等）と実践の関係を紹介することができた。また、授業実践として、授業で行った事前準備、深めた議論の概要を記述し、大学での授業とセンターの連携となる一例（学生が事前学習をして、地域子育て支援センターという現場を訪問し、振り返って議論、共有を行うという学びの手

順)も示すことができた。具体的には、本稿で示した学生達と一緒にフィールドに入る準備と結果から、「ゆめの丘 SAHO」でのフィールドワークを用いた授業では、学生達が教室内で学んだ知識を実感し、インタビューを経験でき、自らが深めるテーマに気づくという意義があると示した。それと同時に、学生自身がテーマに気づくように環境を整える学習面とフィールドワークの準備、実施の円滑な遂行という面を両立することの困難性についても示唆した。

国や都道府県・市町村における子育て支援事業の中で、地域子育て支援センターの果たす役割・特徴、交流会や会議の話し合いを実践にいかす方法、支援の届きにくい親子へのアプローチ、幼稚園・保育所、行政機関、要保護児童対策地域協議会等との連携等について、関連する資料を熟読し、追加の調査も行って研究を深めること、学生参加、現場学習型の授業をさらに展開していくことが今後の課題である^{注11)}。

謝辞

本稿の執筆にあたって、フィールドワークを実施する上で、潮谷光人先生、和田公子先生、奈良市地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」で勤務されるスタッフや利用されている親子の皆様にお世話になりました。また、本稿は2014年度の授業「福祉行財政と福祉計画」の受講生達とフィールドワークの準備や議論を重ね、まとめました。心よりお礼申し上げます。

注釈

- 1) 2013年に、厚生労働省では今後、「ひろば型」及び「センター型」を統合して「一般型」とし、「児童館型」を「連携型」に再編していくという内容を示している¹⁸⁾。
- 2) 行政独自(公立)で運営する地域子育て支援センターの特徴として、「公立で設置されている地域子育て支援センターには、地域の実情に合わせるだけでなく、保育や保健など専門職との連携による総合的な子育て支援を公的な役割を維持しつつ継続的に行える可能性が残されている」¹⁹⁾、「公立型子育て支援センターは全市的な視点と計画を持つて行うことができる」²⁰⁾等の指摘がある。これは、委託型と比して、行政独自の運営であれば、行政の影響が大きくなり、全市的な視点を持ち、計画の基盤とできる可能性が高まることを示唆している。施設の運営が委託型か、行政独自か、によって生じる相違を詳細に検討することは今後の課題である。
- 3) 本稿を作成するために得た情報は、守秘義務、研究倫理を遵守し、当事者に確認を取ってからインタビュー等を行うようにしている。情報に対しては、細心の注意を払って、適切に扱っている。
- 4) 2014年度から事業内容の特徴は、4.の項目で父親支援から家族支援に変化しており、新たに7.の項目が加えられた。公民館、児童館等との連携は「場作りの支援、人的支援、地域の子育て支援の活動の情報交換」があり、公民館に出向いての活動(出張ひろば)ではミニ講座、ベビーマッサージ、リズム遊び、手遊び等をしている¹⁰⁾。
- 5) 子育て相談については「深刻な相談、また予約相談や、大学教員の相談日の相談等を主に計上」し、相談件数は、2009年度に50件を超えたぐらいだったが、2012年度は100件を超えている。相談内容は「基本的な生活習慣や、発育、発達、育児方法に集中している」となっている¹¹⁾。
- 6) 利用している親子へのインタビューでは「駐車場があること」「ひろば(室内)の広さとおもちゃ、スタッフが見てくれること」がよいと、来館の理由を述べる場面もあった。
- 7) 短期大学に設置される地域子育て支援センターからの報告として、札幌大谷大学短期大学部にセンターを設置した経緯と実績をまとめた報告²¹⁾、東横学園女子短期大学に設置される子育て支援センター『ぴっぴ』の取り組みについて、運営責任者にインタビューした結果をまとめた報告²²⁾等がある。

- 8) その他、授業では社会福祉士の試験について、「福祉行財政と福祉計画」の試験傾向を見て、自分が関心を持ち、テキストで深めたい箇所を確認した。また、「社会福祉士の実務経験」を見て、様々な職種があることを確認し、テキストも参考に議論した。さらに、福祉に関する映画作品を見て、現場について知るきっかけにできればと考え、学生が見たいテーマを聞いた。学生達の話では「精神障害、精神病棟」には接したことがなく、イメージがつきにくいということだったので、「精神障害」に関するテーマの映画を鑑賞することを考えた。
- 9) その他、授業では社会福祉士の受験資格として必要となる実務経験の一覧表を見て、様々な施設、職種があることを前回に引き続いて確認した。テキストも参考に話し、学生が疑問を感じた「身体障害者更生援護施設 身体障害者更生施設 内部障害者更生施設」について説明を行った。「精神障害」に関するイメージを膨らませるために視聴する映像作品として、ミロス・フォアマン監督「カッコーの巣の上で」(1975)か、ジェームズ・マンゴールド監督「17歳のカルテ」(1999)を筆者が提案した。話し合いの結果、「カッコーの巣の上で」を視聴することになった。
- 10) インタビューは、親子2組に対して、計1時間程度であった。話の内容は「ゆめの丘SAHO」に関して(来訪のきっかけ、よさ等)、子育ての苦勞、職場と日常生活等であった。親子に行ったインタビューデータを基に、別稿で論じることが今後の課題である。
- 11) 今後、機会を作って、ボランティアも行き、職員の方々や利用される親子、センターにかかわる教員や学生にもさらなるインタビュー、アンケートを行うことで、継続した調査、研究を行う希望を筆者は持っていて、センター長、バックアップ担当教員(1人)に今後ご厚情いただける。

引用・参考文献

- 1) 中西真:「少年非行の現状と子どもたちの背景。少年非行への対応と、専門機関・専門職の役割」、『知識を生かし実力をつける 子ども家庭福祉』, 保育出版社, pp.133-136, (2013)
- 2) 中西真:『家庭的な保育』としての『京都市昼間里親制度』の先駆性と独自性 :『昼間里親保育』の誕生と発展、その歴史『シュツツ・生活史研究会 報告資料』(2014)
- 3) 厚生労働省:「地域子育て支援拠点事業 実施のご案内」(2007)
- 4) 厚生労働省:「地域子育て支援拠点事業実施要綱」<http://kosodatehiroba.com/pdf/14box/h26chiikikosodateshienkyoten-yokou.pdf> (2014.11.30)
- 5) 厚生労働省:平成24年度地域子育て支援拠点事業実施箇所数(子育て支援交付金交付決定ベース), <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/24jokyo.pdf> (2014.11.30)
- 6) 大谷由紀子, 中山徹, 瀬渡章子:「全国の自治体における子育て支援センター事業の設置運営体制」, 『日本家政学会誌』, 56 (9), pp.661-672 (2005)
- 7) 松永愛子:「地域子育て支援センターの役割について:状況の多重性の中での『居場所』創出の場として」, 『保育学研究』, 43 (2), pp.166-178 (2005)
- 8) 松永愛子:『地域子育て支援センターのエスノグラフィー:「親子の居場所」創出の可能性』, 風間書房 (2012)
- 9) 奈良佐保短期大学:「奈良市地域子育て支援センター『ゆめの丘 SAHO』」, <http://www.narasaho-c.ac.jp/kosodate/> (2014.11.25)
- 10) 奈良市地域子育て支援センター「ゆめの丘 SAHO」:「奈良市地域子育て支援センター『ゆめの丘 SAHO』プレゼンテーション資料」(2014)
- 11) 石田裕子, 石田伸子, 潮谷光人:「奈良市子育て支援センター『ゆめの丘 SAHO』からの報告」, 『奈良佐保短期大学研究紀要』, (21), pp.51-61 (2013)
- 12) 奈良市地域子育て支援センター:「ゆめの丘 SAHO」パンフレット
- 13) 奈良市:「地域子育て支援センター」, <http://www.city.nara.lg.jp/www/contents/1174555934>

- 772/ (2014.11.25)
- 14) 奈良県：「地域の子育て支援大学ネットワーク」, <http://www.pref.nara.jp/31051.htm> (2014.11.25)
 - 15) 『福祉行財政と福祉計画第4版(新・社会福祉養成講座10)』中央法規出版, (2014)
 - 16) 佐藤郁哉：『フィールドワーク：書を持って街へ出よう 増訂版』, 新曜社 (2006)
 - 17) 佐藤郁哉：『暴走族のエスノグラフィー：モードの叛乱と文化の呪縛』, 新曜社 (1984)
 - 18) 厚生労働省：「地域子育て支援事業とは(概要)」, http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate_sien.pdf (2014.11.30)
 - 19) 井上大樹, 河野和枝, 沢村紀子, 前田典子, 山下由起夫, 吉岡亜希子：「子育て支援センターの機能と地域子育て協同への可能性」, 『北海道大学大学院教育学研究紀要』, (105), pp.111-150 (2008)
 - 20) 小崎恭弘：「公立型地域子育て支援センターの役割と課題」, 『神戸常盤短期大学紀要』, 26, pp15-24 (2005)
 - 21) 大西道子, 星信子, 清木郁太郎, 桑野敏明, 拓殖純一, 入江明美, 戸田竜也, 山田智子, 浜栄子：「札幌大谷大学短期大学部子育て支援センターの設置の経緯と利用の実績」, 『札幌大谷短期大学紀要』, 38, pp.37-67 (2008)
 - 22) 小川清実, 首藤美香子：「児童学からの出発 地域・子ども・大人の『関係をつなぐ』(1)：東横学園女子短大子育て支援センター『ぴっぴ』の取り組み」, 『幼児の教育』, 104 (9), pp.8-16 (2005)